第七講『大唐新語』／『十八史略』

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

上元初、吐蕃強盛、詔募猛士以討之。婁師徳以監察御史応募。高宗大悦、授朝散大夫、専総辺任。前後四十余年、恭勤接下、孜孜不怠。狄仁傑入相也、師徳密[a]薦之。及為同列、頗[b]軽師徳、頻擠之外使。師徳知之而不憾。則天覚[1]之、問仁傑曰、師徳賢乎。対曰、為将謹守、賢則臣不知。又問、師徳知人乎。対曰、臣嘗[c]同官、未聞其知人。則天曰、朕之用卿、師徳実薦也、亦可謂知人矣。仁傑大[2]慚而退、歎曰、婁公盛徳、我為其所容、莫窺其際也。当危乱之朝、屠滅者接踵、而師徳以功名終始、識者多之。初、師徳在廟堂、其弟某以資高拝代州都督。将行、謂之曰、吾少不才、位居宰相。汝今

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

又得州牧、叨拠過分、人所嫉也。将何以終之。弟対曰、［3］自今雖有唾某面者、亦不敢言、但自拭之、庶不為兄之憂也。師徳曰、此適為［4］我憂也。夫前人唾者、発於怒也。汝今拭之、是逆前人怒也。唾不拭将自乾、［5］何如笑而受之。弟曰、謹受教。師徳与人不競、皆此類也。

（『大唐新語』による）

〔注〕
- ○上元――唐代の年号。
- ○吐蕃――チベットの王国。
- ○婁師徳、狄仁傑――いずれも人名。
- ○監察御史、朝散大夫、都督――いずれも官名。
- ○高宗――唐代の天子。
- ○辺任――辺境の任務。
- ○孜孜――つとめ励むさま。
- ○相――宰相。
- ○擠――おしのける。
- ○外使――外国への使者。
- ○則天――則天武后。
- ○際――際限。
- ○屠滅――ほろびる。
- ○廟堂――朝廷。
- ○州牧――州の長官。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　波線部ａ「密」ｂ「頗」ｃ「嘗」の読みを、それぞれ平仮名で記せ。

ａ＝　　　　ｂ＝　　　　ｃ＝

問二　傍線部１「覚レ之」は、何を覚ったのか説明せよ。

問三　傍線部２「大慚而退」とあるが、それはなぜか説明せよ。

問四　傍線部３「自レ今雖レ有下唾二某面一者上、亦不二敢言一」を書き下し文にせよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　傍線部４「我憂」とは何か、説明せよ。

問六　傍線部５「何二‐如笑而受レ之」を現代語訳せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問七　婁師徳はどのような人物か、本文の内容を要約しながら百五十字以内で述べよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二　傍線部①「堯年鼓腹」（現古融合文中に有。ここでは省略）は、『十八史略』の以下の逸話にもとづく言葉である。以下の漢文を読んで問いに答えよ。（返り点を省略した部分がある。）

帝堯陶唐氏、（略）帝嚳子也。其仁如レ天、其知如レ神。就レ之如レ日、望レ之如レ雲。都二平陽一。茆茨不レ剪、土階三等。（略）ａ治二天下一五十年。不レ知二天下ｂ治一歟、不レ治歟、億兆願レｃ戴レ己歟、不レ願レ戴レ己歟。問二左右一、不レ知。問二外朝一、不レ知。問二在野一、不レｄ知。②乃微服游於康衢。ｅ聞二童謡一。曰、「立二我烝民一、莫レ匪二爾極一。不レ識不レ知、順二帝之則一」。有二老人一、含レ哺鼓レ腹、撃レ壌而ｆ歌曰、「日出而作、日入而息。鑿レ井而飲、耕レ田而食。帝力何有二於我一哉」。

『十八史略』

問一　傍線部ａ「治」と共通の主語をもつ動詞を、ｂ〜ｆの中から一つ選べ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部②「乃微服游於康衢」の読み下しとして、正しいものを次の１～５の中から一つ選べ。

１　乃れ微かに康衢にて服游す
２　乃微服にて康衢を游ぶ
３　乃ち微服して康衢に游ぶ
４　乃れ微して服游に衢を康す
５　乃ち微かに康衢を服游す

問三　尭と並び称される名君を、次の１～５の中から一つ選べ。

１　明　　２　蘇武　　３　舜　　４　呉　　５　孔明

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第七講

①「張頗異トシレ之ヲ、…」の傍線部の読み方を、送り仮名も含めて平仮名で書け。

注　張…張約斎。宋代の人。

②「嘗有リ二友人一問フ、…」の傍線部の読みを、送り仮名も含めて平仮名で書け（平仮名以外に何も書かないこと）。

③「将タ安ンゾ得ン」を現代語訳せよ。

④「溥(ふ)天之下莫レ非ニ二王土一」の傍線部を現代語訳せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第七講】

〔模範解答〕

一

問一　a＝ひそかに　b＝すこぶる　c＝かつて

問二　狄仁傑が婁師徳のおかげで宰相となれたにも関わらず、婁師徳のことを軽んじて朝廷から追い出そうとし、婁師徳はそれを知っても恨んでいないということ。

問三　狄仁傑は則天武后から自分が宰相になれたのは婁師徳の推薦であったという真実を聞かされ、それにも気づかず婁師徳を見下していた自分の行いを恥じたから。

問四　今より某の面に唾する者有りと雖も、亦（た）敢へて言はず

問五　分不相応にも州の長官となった弟が、他人から妬まれて、長官の仕事をきちんとすることができなくなるといけないという心配。

問六　唾を顔面にかけられても笑って吐きかけられるほうがよい。

問七　怠けずに実直に任務をこなし、部下にも丁寧に接することができ、自分が推薦した人物が、自分を退けようと画策しても恨まない器の大きな人物で、州の長官となった弟には、人から妬まれた場合の対処法を的確に助言ができ、万事人と争うことなく、うまく世を渡っていくことができ、死ぬまで名声を保った有能な人物。（百四十五字）

二

問一　e　問二　３　問三　３

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔現代語訳〕

一

上元の初め、チベットの王国の吐蕃が勢力を増してきたので、詔を出して勇猛な人物を募集してそして吐蕃を討とうとした。婁師徳は監察御子でこの募集に応じた。高宗はとても喜び、朝散大夫を授け、ひたすら辺境の任務を統括させた。四十年ほど、恭しく勤めて部下の者たちに応対し、つとめ励む様子は怠ることがなかった。狄仁傑は宰相となったが、婁師徳がひそかに狄仁傑を推薦したのである。（狄仁傑は婁師徳と）同じ地位になると、ひどく婁師徳を見下し、しばしば婁師徳を外国の使者におしのけようとした。婁師徳はこれを知っていたが恨まなかった。則天武后はこのことに気付き、狄仁傑に質問して言うには、「婁師徳は賢者か」と。（狄仁傑が）答えて言うには、「将軍となって職務を忠実に守っていますが、賢者かどうかは私にはわかりません」と。また（則天武后が狄仁傑に）質問するには、「婁師徳は人（の善し悪し）を見分けることができるか」と。（狄仁傑が）答えて言うには、「私は以前同僚でしたが、まだ婁師徳が人を見分けることができると聞いたことがありません」と。則天武后が言うには、「私があなたを登用したのは、婁師徳が実は推薦したからである、また（あなたを推薦した婁師徳は）人（の善し悪し）を見分けることができると言えるでしょう」と。狄仁傑はひどく恥ずかしく思って（則天武后の前から）退き、歎息して言うには、「婁師徳の大いなる人徳、私はその人徳に包まれていたが、その人徳の際限をうかがい知ることができなかった」と。朝廷が乱れた時代にあって、命を失ってほろびる者は絶えることがなかったが、婁師徳は功績と名声を死ぬまで保ち、見識のある人物は婁師徳を立派な人物だと評価している。さて、婁師徳が朝廷にいたとき、彼の弟が優秀ということで代州都督に任命された。（弟が任地に）出発しようとすると、（婁師徳が）弟に言うことには、「私は若くて才能がなかったが、宰相の地位に立っている。お前が今また州の長官に就き、かたじけなくも分不相応の地位に就くことは、人々が妬むことである。いったいどのようにして職務を全うしようとしているのか」と。弟が答えて言うには、「これからは私の顔に唾を吐く者がいても、決して何も言わないで、ただ自分で顔を拭うだけにすれば、兄の心配にはならないでしょう」と。婁師徳が言うには、「これがまさに私の心配となるのだ。そもそも唾を吐く者は、怒りを覚えたからである。お前がもし唾を拭ったならば、それはその人の怒りに逆らうことになってしまう。唾は拭かなくても自然と乾くだろう、笑って唾を吐きかけられるのとどちらがよいか、笑って唾を受け止めるほうがよい」と。弟が言うには「謹

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

んで教えを守ります」と。婁師徳が人と競争しないことは、すべてこのようである。

二

皇帝の尭陶唐氏は、（略）帝嚳の子である。その仁愛は天のよう（に広大）で、その知恵は神のようだ。近づけば太陽のよう（に温かな人）で、遠くから見ると（恵みの雨に満ちている）雲のようだ〔＝慈愛に満ちた人物である〕。平陽を都とした。宮殿のかやぶき屋根は（端を）切りそろえておらず、土で作った階段は三段だけ（の質素なもの）であった。（略）（尭が）天下を治めて五十年。天下が（無事平安に）治まっているのか、治まっていないのか、人民が自分を皇帝にしたいと願っているのか、自分を皇帝にしたいと願っていないのかがわからなかった。側近に問うても、（側近には）わからない。役人に問うても、（役人も）わからない。民間の人に問うても、（民間人にも）わからない。そこで目立たない服装で大通りに出歩いてみた。（そして尭は）童謡を聞いた。（その童謡に）言うには、「われわれ万民が生活できるのは、すべてあなたの強い力（のおかげ）です。知らず知らずのうちに、皇帝の決まりに従っている」と。老人がいて、物を食べてお腹を叩き、足で地面を踏み鳴らして歌うことには、「太陽が昇れば耕作し、太陽が沈めば休む。井戸を掘って（水を）飲み、田を耕して食べる。皇帝の力は私には何の関係もない」と。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答解説　第七講

〈解説〉

① 「頗」は、主語「張」と動詞「異トス」の間にあることから副詞で、「すこぶル」と読む。

② 「嘗」は、動詞「有」の上にあるので、副詞で「かつテ」と読む（名詞で「秋の収穫祭」という意味もあるが、文脈から考えられない）。「嘗」の読みを問われたならば、副詞「かつテ」から考えるのがコツ（名詞の意味は覚えておく必要はない）。ちなみに、動詞で「なメル・なム」という読みもある。こちらは「臥薪嘗胆（＝薪の上に寝て、肝をなめたりして、復讐するために屈辱の思いを忘れまいと辛苦して自らを励ますこと）」という四字熟語で覚えておくとよい。

③ 第四講でも学習したが、再読文字以外の用法の「将」として、「いったい（どうして～であろうか）」という反語を強める用法の副詞「はタ」がある。「安（いづく）ンゾ～ン」は反語である。

④ 二重否定「莫非～」は、「～でないものはない・皆～だ」と訳す。よって、傍線部は「王土に非（あら）ざるは莫（な）し」と読み、訳は「（広大な天の下は）王の土地でない所はない」となる。「全部、王の土地だ」なども可。

〈解答〉

① すこぶる　② かつて　③ いったいどうして得られようか、いや、得られない。

④ 王の土地でない所はない

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。